三鷹市下水道経営計画２０２７

＜三鷹市下水道事業経営戦略＞

～安全安心で、清潔な暮らしを守るために～

令和７年３月

三　　鷹　　市

三鷹市下水道経営計画 2027 の策定にあたって

～安全安心で、清潔な暮らしを守るために～

三鷹市ではこのたび、2027 年（令和９年）までの下水道事業の総合的かつ計画的な事業展開と財政運営の見通しを明らかにするとともに、効果的・効率的な下水道事業の推進を目的とした『三鷹市下水道経営計画 2027』を「下水道事業審議会」の委員や市民の皆様のご意見等を踏まえて策定いたしました。

三鷹市は 1959 年（昭和 34 年）に下水道整備工事に着手し、1973 年（昭和 48 年）に公共下水道整備 100％を全国の自治体で初めて達成しました。公衆衛生の専門家でもあった鈴木平三郎第 3 代三鷹市長は、清潔なくらしを保障する為に下水道整備を最重点施策と位置づけ、多額の財源を国・都の補助金や市債等を活用して確保するとともに、下水道事業費の一部を市民の皆様の理解を得て負担金として徴収する「受益者負担金制度」を導入して推進しました。

下水道事業は、汚水処理については下水道使用料で賄うことが原則であり、持続可能な下水道を構築していくためには、何よりも健全な経営の継続が求められていることから、2020 年（令和 2 年）4 月には地方公営企業法を適用し、より明瞭な経営状況の分析に取り組んでいます。

現在市内には約 457 kmの下水道管きょが整備され、東部水再生センター等の施設を維持管理しています。下水道施設は、日常生活や企業等の生産活動から排出される汚水を適切に処理して良好な生活環境を保全するとともに、雨水を河川等に適切に排水して水害から守るために必要不可欠な施設です。大地震をはじめ、昨今は大規模な自然災害が多発しており、暮らしを支える下水道施設の重要さが再認識されています。一方、整備完了から 50 余年が経過した三鷹市の下水道関連施設は老朽化の課題に直面しており、下水道施設を維持・更新していくためには今後大きな財政負担が想定されます。また、東京都の「多摩川・荒川等流域別下水道整備総合計画」では、2025 年（令和 7 年）3 月（予定）の計画改定案においても単独処理区である東部処理区の流域下水道への編入が位置づけられていますが、編入に係る詳細が確定するまでには時間を要することもあって、東部水再生センターの維持・設備更新が必要となります。

さらに、令和７年１月には、埼玉県八潮市で下水道等に起因する大規模な道路陥没事故が発生しました。今後は、当該事故に関する国の有識者会議の結果等を踏まえ、維持管理の充実を図りより安全で安心な下水道施設としていく必要があります。

三鷹市では、これらの課題解決に向けて本計画に基づき健全な下水道経営と、安定した下水道サービスの提供に努め、引き続き市民の皆様が安全安心で清潔な暮らしを送れるよう取り組んでまいります。どうぞ、ご協力をお願いいたします。

令和７（2025）年３月

三鷹市長　河　村　　孝

目 次

第 1 章 計画の前提 1
1.1. 目的 1
1.2. 背景 1
1.3. 計画の位置付け 3
1.4. 計画期間 3
第 2 章 三鷹市公共下水道の概要 4
2.1. 下水の排除方式（合流式と分流式） 4
2.2. 処理区域と処理系統 5
2.3. 三鷹市の下水道施設の概要 7
2.4. 三鷹市の下水道使用料の概要 8
2.5. 多摩川・荒川等流域別下水道整備総合計画 9
第 3 章 下水道の現状と課題 11
3.1. 下水道施設の老朽化 11
3.2. 下水道の地震対策 13
3.3. 都市型水害対策 14
3.4. 循環・共生のまちづくりへの対応 15
3.5. 経営基盤の強化 16
第 4 章 計画の基本的方向 17
4.1. 計画の基本方針 17
4.2. 計画の体系 18
4.3. 計画の取り組み概要 19
第 5 章 主な事業・施策の内容 20
5.1. 主要な取り組みの抽出 20
5.2. 目標指標 20
5.3. 下水道施設の老朽化対策 21
5.4. 都市型水害対策の推進 23
5.5. 経営基盤の強化 25
5.6. その他の事業・施策 28
5.7. 事業計画 30
第 6 章 下水道財政計画 32
6.1. 下水道財政のしくみ 32
6.2. 現状整理 35
【経営の健全性・効率性】 36

【老朽化の状況】.....39
6.3. 将来財政計画 49
6.4. 使用料の適正化に向けた検証 56
6.5. 投資・財政計画（収支計画） 57
第 7 章 計画の推進及び事後検証・更新 63
7.1. 協働の取り組み 63
7.2. 経費回収率の向上に向けたロードマップ 64
7.3. 事後検証・更新.....65
【参考資料】用語解説 66